

那覇市城西小学校における空間計画論の研究

日大生産工(院) ○豊留 佑依 日大生産工 篠崎 健一

1 はじめに

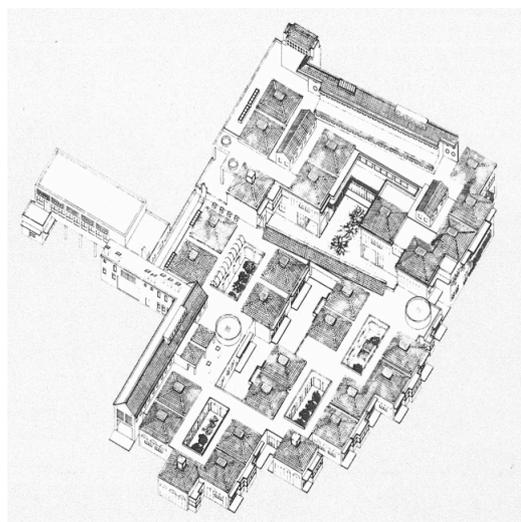
1-1 研究背景と目的

新しい空間に触れたとき、私たちはどのような印象を受けるだろうか。また空間は人にどのような想いを与えるだろうか。那覇市城西小学校という場所を訪れたとき、自然と共に建っているその小学校には物理的な感じがなくどの場所でも光が降り注ぎ、風が吹き付け、雨が降っても不快感がないその魅力的な空間に触れた。その小学校に通う子供たちはその空間を活発に動き走り回る。風景も想像できるほど私はその空間から強い印象を与えられたのだ。それは新たな感覚でもあるが、何であるかはわからない。けれど非常に重要な要素であろう。そのプロセスはなにか。研究の序章として城西小学校の設計趣旨を明確にすると共に考察する。

1-2 城西小学校

沖縄県那覇市真和志町、首里城の守礼門の手前にある小学校である。明治19年に「首里小学校女子教育教場」として沖縄で初めて女子教育の振興に資する目的で創立された。後に沖縄女子師範学校付属の小学校に代用され、沖縄県での教育の進展に大きく貢献した。第二次世界大戦の沖縄戦で校舎は全焼し、昭和21年に城西初等学校として再開。昭和27年に那覇市立城西小学校という名に変更され児童数696名学級数23学級で創立127年目を迎えている。(平成24年5月)現在の建物は建築家である原広司+アトリエファイ建築研究所が1987年に建てたものである。景観に配慮した建物である。既存の屋内運動場と特別教室棟は

残し、教室棟を中心にした計画であり集落の屋根をモチーフにして分散的に配置されている。平屋であるのは低学年・中学年棟と2階建ての高学年教室棟からなり、各学年5教室の構成で、低・中学年教室は中庭、高学年教室はワークスペースを囲んでクラスター状に集まっている。オープンなスペースは採光や風通しなどが十分は配慮されている。



屋根伏アクソメ図

2 空間構成

2-1 共に進行中であった8つのプロジェクト¹⁾

城西小学校計画中に共に進行していた8つのプロジェクト(田崎美術館、嶋邸、高田の住居、小波蔵邸、北白河の住居、堤邸、ヤマト・インターナショナル新社屋)の中で原広司が城西小学校についてのデザインプロセスと共に空間構成についてこの論では2つの要素を述べる。

2-2 埋蔵のイメージ

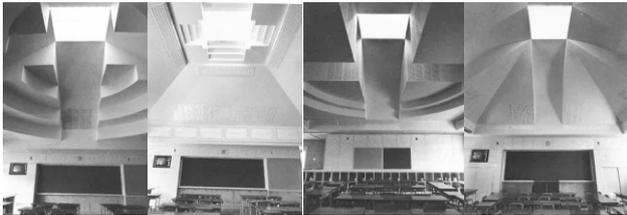
設計当時、原広司は主に住宅の計画を行っていた。住宅設計では小さな空間の中でいかに大きなモノを

Research of space planning theory in Naha Josai elementary school

TOYOTOME Yui and SHINOZAKI Kenichi

容れるという考えで設計を行っていた。それは埋蔵というイメージに近い。それが寸法の大きな建物となった時、ある一定のスケールを保ちながら小さな埋蔵空間が並んで構成され、それらは集落のイメージと近いと述べている。この埋蔵のイメージはこの小学校の造形に大きく現れているだろう。小さな埋蔵空間は教育機関でいちばん大事な空間である教室空間になっている。埋蔵のイメージは教育空間では学び屋のスペースであることは間違いない。そしてそれらの小さな埋蔵空間にも一つずつ違いが現れている。それは天井空間である。教室一つ一つの天井はすべてかたちが違う。それらは児童達に空間の認識を強く感じさせているだろうし、小学校全体の位置を日々生活している中で無意識にプロットする力があるとなれば、それは地図のように空間から空間へと移動する流動性も生まれてくるだろう。

(下：教室群の屋根 内4種類)



2-3 中庭と床面のオーバーレイ

前項で述べている埋蔵のイメージは集落というかたちに対して有効となってくるのだが、有効とするには集落の形式が大きく関わってこなくてはならない。小さな埋蔵空間を並べても集落とは言えず、立体的なイメージでしか構成する事が出来ないからである。この集落と強く結びつけるものとして平面の構成、つまり中庭と床面が非常に重要となってくる。

原広司はここで多層図式が有効な手段であると述べている。それが構造化された場合の多層構造はもともと都市なりの景観のイメージに起源するものだからと述べている。¹⁾ その初源的な取り組み方としてオー

バーレイ（重ね合わせ）を使用している。具体的な例として那覇市の民家の町並み、畳の重ね合わせとオープンプランを持つ床レベルで空間的にオーバーレイを意図している。ここでは小学校のオープンプランを実現するために埋蔵を箱ではなく畳がいくつも並ぶ事でオープンな空間もただ広いだけではなくひとつひとつの空間を確立するために床面を確保しているという意図を持つ。ということはオープンプランでもしっかりと空間という認識を持つと共に領域もしっかりと区別されてくる。中庭からアプローチし、オープンスペースを一つ一つの確保された空間に行く。その埋蔵された空間に入ると天井が目に入り、そこから自然とこぼれる太陽の光が柔らかく教室を照らしてくれていたのだ。これは私がうけた新感覚の経験の一部だ。



(右：中庭からの写真 左：中庭兼四年生ワークスペース²⁾)

3 空間計画論

城西小学校を訪れた時は学校という意識で訪れた。そこには想像していた学校空間ではなくとても強い印象を与えられた。しかし空間計画としては教育機関ではなく、そこは街に開かれた第二の都市なのではないだろうか。そこには小さな集落が存在していて、私は知らないうちに一つの集落に来ていたのだろう。

[参考文献]

- 1) 原広司-様相の経路 建築文化 493 (1987) p.27-74.
- 2) 〈様相〉に向けて (原広司の近況—現在進行中の8つのプロジェクト) 建築文化 465 (1985) p.33-58.